

第3章 まちづくりの視点からの子育て支援

- 「まちひとぶら座 かんかこかん」 -

はじめに

JR高山駅から歩いて15分、安川通り商店街の中ほどに、築70数年の2階建ての商家を一部改修してつくられたコミュニティ施設「まちひとぶら座 かんかこかん」(以下、「かんかこかん」と記す)がある(右写真)¹⁾。「かんかこかん」は年末年始を除き、毎日10時から17時まで開いている。1階で実施している「つどいの広場」事業の「こどもひろば」に遊びにくる親子、観光情報を知るために立ち寄る旅行者、2階の集会室を利用する市民など、誰もが気軽に立ち寄り、それぞれが思い思いにくつろいだり、交流したりしている。



昨今、各地で商店街の協力を得て、空き店舗を活用した子育て支援事業が行われている²⁾。「かんかこかん」もそのひとつである。しかし、「かんかこかん」はそれだけにとどまらず、まちづくり市民活動の拠点であり、地域に住む人々の交流の場にもなっている。「かんかこかん」は子育て支援施設として特化されてはいないため、多様な人々がこの施設に出入りしている。このことから、施設そのものが子育て中の親子が子育て支援者のみならず、地域の様々な世代の人々と自然に触れ合う機会を提供していると考えられる。この点が、「かんかこかん」の特徴のひとつであるが、なぜこのような施設がつくられるに至ったのであろうか。

「かんかこかん」のもうひとつの特徴は、まちづくりの一環として子育て支援活動を展開していることである。一般的に子育て支援活動では、個々の子育て中の親子に対する支援に力が注がれているため、「まちづくり」という、より広い視点から活動を捉え、位置づけることが少ない。まちづくりが人と人、人と地域をつなぎ、より住みよい環境づくりをしていくことであるならば、子育て中の親子同士、子育て家庭とそれ以外の地域の人々をつなぎ、子育てにやさしい環境づくりをしていく点で、子育て支援活動もまたまちづくりの一環であると言える。また、まちづくりの視点で考えれば、子育て中の親子は支援の受け手であるだけでなく、自らが住みよいまちをつくる担い手でもある。「かんかこかん」の活動は、そうしたことに正面から取り組んでいる。

加えて、それらの活動や施設運営を市民、行政、商店街等が協働で行っている点も、「かんかこかん」の特徴である。では、まちづくりの視点から子育て支援事業を展開するとはどのようなものであるのだろうか。また、どのような経緯で協働による運営体制がとられるになったのであろうか。これらの点に焦点をあて、「かんかこかん」の取り組みを探っていくことにしたい。なお、以下では、「かんかこかん」の運営委員会の委員長である伊藤早苗さん、「こどもひろば」のスタッフである山岸さん及び「こころんネット1・2の3」の事務局スタッフである中川さんに伺ったお話(2007年1月15日)及びその際に頂いた資料を用いる。

1. 「かんかこかん」の概要

(1) 高山市の状況

まず、「かんかこかん」の開設や活動の背景となる高山市の状況について、簡単に触れておき

たい。高山市は、2005年2月に10市町村（旧高山市、国府町、久々野町、朝日村、上宝村、清見村、莊川村、丹生川村、高根村、宮村）が合併し、日本一面積の広い市（そのうち92.5%が森林面積である）となっている。現在、人口は約9万6千人（2007年1月1日現在）であり、14歳未満の人口構成比は14.8%（合併時）である。過去5年間の年間平均出生数は、約950人（2000～2004年度の10市町村合わせたもの）である³⁾。

高山市では祖父母世帯との別居などにより、子育て世帯における核家族化が進行している⁴⁾。伊藤さんや中川さんの話によれば、子育て世帯では、市街地から郊外に移り住む傾向があるという。こうした在宅で子育てをしている家庭に対する支援は⁵⁾、地域子育て支援センター（1カ所）、児童センター及び児童館（4カ所）、「つどいの広場」（10カ所）で、親子交流や遊び、子育て相談が実施されている。その他に、乳幼児家庭教育もある。

ところで、高山市の市街地は観光の名所である。市街地には、国選定重要伝統的建造物群保存地区になっている古い町並の他、歴史的建造物などの観光スポットが多く存在している。そして、これら観光スポットの周囲には複数の商店街通りがある。つまり、高山市の市街地は、生活の街としてだけでなく、商業・観光の街としても栄えてきたところである⁶⁾。しかし、先に述べたように、子育て世帯の多くが郊外に住むようになったため、まちなかで生活をする人々が減少してきているという。加えて、郊外に住む人々の主な移動手段が車となったため、駐車場が少ない市街地の商店街を利用する人々が減少している。つまり、子育て世帯がまちなかに住んだり、まちなかへ来たりすることが減少しているのである。この結果、生活の場として、また、商業の場として、まち全体の活力が弱まり、まちなかの衰退していくことが懸念されている。このような状況のもとで、「かんかこかん」は商店街の一角に開設されたのである。

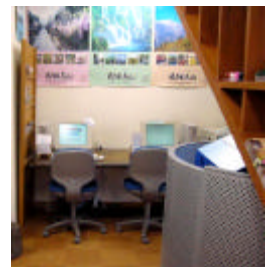
（2）「かんかこかん」の概要

「かんかこかん」は市街地にある商店街の空き店舗を活用したコミュニティ施設である。「かんかこかん」が開設されたのは、2003年4月のことである。この開設は、2002年度商店街空き店舗活用支援事業・コミュニティ施設活用商店街活性化事業として、高山市から改修費と賃借料の補助を受けて行われたものである。「かんかこかん」の管理運営主体は高山市商店街振興組合連合会であるが、実質的な運営は市民（飛騨高山まちづくり本舗）、商店街や商工会議所の人々及び高山市職員（商工課や子育て支援課）などにより構成された運営委員会が担っている。有償のメンバーは、2.5人（つどいの広場事業担当）であり、それ以外のメンバーは無償のボランティアである。本業を別に持っている人たちが運営を行っているため、運営委員会は月に1回夜に開かれている。その他に、毎週水曜日にランチミーティングが行われている。これは、毎週水曜日の昼食時に都合のつくメンバーが集まり、事業の細かい打ち合わせや確認を行うものである。

ところで、「かんかこかん」の開設にあたっては、次のような経緯がある。高山市ではまちづくりを考える市民の活動（「高山市まちづくり・住まいづくり研究会」）が1997年より行われていた。そこでは、空き店舗を使ったコミュニティ・センターの開設を願い、かねてから市にその要望を出していたという。それが2002年度に入り、これまで起業家支援に利用されていた空き店舗対策の補助金事業を、コミュニティ施設の開設に使用しても構わないという話になったのである。同時に、2003年度から実施予定の厚生労働省の「つどいの広場事業」の話もあるので、これも一緒に受託しないかという提案も出された。この話を受けてすぐに、以前からまちづくりを考えていた市民たちが動き出し、準備委員会を立ち上げたのである。開設の、半年前のことである。この準備委員会には、子ども関係の活動をしている人、福祉関係の活動を

している人、建築家、商店街の人、市議会議員などあらゆる職業、立場の人々が 55 人集まったという。この準備委員会では、どのような施設をつくりたいのか、どのように運営していくのか、つどいの広場事業の会場をどのようにつくりたいのか、どんな名称にするのかなど、集まった人々がそれぞれに意見を出し、長い時間をかけて話し合われたそうである。斯くして、「かんかこかん」は、高山市からつどいの広場事業（厚生労働省）を受託し、子育て支援活動を展開する役割も併せ持つコミュニティ施設として開設される運びとなった。そして、「かんかこかん」は、市内で最初に実施するつどいの広場の会場となったのである。

このようにしてつくられた「かんかこかん」のコンセプトは、誰もが気軽に立ち寄り、交流し語らいができるサロン、「まちの縁側」である。そして、その実現は「こどもひろば」「まちづくりひろば」「情報ひろば」の3つのスペースで目指されている。「こどもひろば」は、乳児からお年寄りまでが立ち寄り、交流したり、遊んだりできるスペースである。オムツ換えや授乳できるスペースや食事ができるテーブルもあり、子どもを連れた買い物客や観光客にもお休み処としても利用されている⁷⁾。「まちづくりひろば」は、研修会や各種会合ができるスペースを通じて、まちづくりの市民活動に関わる人々をつなげていく「まちひとづくり」の拠点となっている。具体的には、NPO、ボランティアの交流や育成、まちづくりに関する情報収集・発信などが行われ、市民活動の事務局機能も担っている。「情報ひろば」（右写真）には、インターネットが置かれており、インターネットの利用ができる他、観光情報や行政情報などが提供されている。



「かんかこかん」の利用者は、開設当初の 2003 年 5 月では 1,361 人（うち、「こどもひろば」の利用者は 373 人）であったのが、2006 年 10 月には約 4,300 人（うち、「こどもひろば」の利用者は 737 人）まで増えている。開設から 3 年半の間に、「かんかこかん」の存在は徐々に市民のなかに浸透してきているようである。

なお、「かんかこかん」が現在抱えている課題は、いかにして資金力を高めるかということである。現在、「かんかこかん」の施設運営に関わる経費は、家賃と人件費はつどいの広場事業から出され、施設の光熱費や維持費は市商連から出され、消耗品にかかる経費はレンタル料や一時保育、農家の協力を得て実施している野菜販売などの収益によってまかなわれている。今後、つどいの広場事業の受託が終了した後の家賃や人件費をどう捻出するのかが課題となっている。

2. 子ども・子育ての活動にみる「かんかこかん」の特徴

「かんかこかん」を拠点とした市民活動は、まちづくりを主目的とし、様々な分野にわたる活動が展開されている。子ども・子育てに関わる活動もこの取り組みのひとつとして位置づけられている。ところで、「かんかこかん」が目指しているまちづくりとは、個人の悩みや不安、課題に対して、同じ社会に暮らす生活者として互いに向き合う関係、そして、そうした悩みや不安、課題の軽減に向けて一緒に考え動いていけるような、他者に寄り添う関係が地域の実情に応じてその場所ごとにつくられることである（『飛騨高山まちづくり本舗』2004、1～2頁）。「かんかこかん」の役割は、そうした実践を支える仕掛けや仕組みづくりをしていくことである。そこで、子ども・子育ての活動に着目し、「かんかこかん」の活動が具体的にどのように展開しているのかを探ってみることにした。その活動には、「集う」「つなぐ」「育む」という3つの特徴が見いだせる。以下、それぞれの特徴について説明していく。

（1）集う - 集う場づくりで、まちなかに若い世代を引き寄せる -

「かんかこかん」の子ども・子育てに関わる中心的な活動は、「こどもひろば」での乳幼児からお年寄りまでが気軽に集える場づくりである。「こどもひろば」は10組の親子がいると少々窮屈に感じるようなこぢんまりとした広さである(左下写真)。「かんかこかん」のドアを開けて入ると、「こどもひろば」から「いらっしやい」「こんにちは」とスタッフの声がかかり温かく迎えらる。そのため、「こどもひろば」には、知らない人同士でもすぐに打ち解けてしまえるような雰囲気がある。実際に、「こどもひろば」を利用する母親から、他の親子ともとけ込みやすく、リラックスできるという声が上がっているそうである。



1階にあるこの「こどもひろば」には、実に様々な人々が訪れる。平日、午前中から3時頃までは、乳幼児とその親が遊びにくる。3時をすぎると、保育園・幼稚園帰りの幼児がお母さんと一緒にやってくる。「こどもひろば」担当の山岸さんによれば、母親と子どもが多いが、祖母と孫、父親と子どもと一緒に立ち寄ることもあると話す。また、授乳やオムツ替えをしに訪れた観光客の親子も、ときには地元の子どもと交じって遊んでいくこともある。小学生は、主に土曜・日曜日に「かんかこかん」にくることが多いそうだが、平日でも3時過ぎ頃から「ただいま」と言って入ってくる。こうした小学生たちは遊びにくるだけではなく、友だちとの待ち合わせや塾に行くまでの10分か15分程度を過ごすためにも立ち寄るそうである。そのため、「こどもひろば」では、子どもを連れた母親同士が仲良くなるだけではなく、お互いによく顔を合わせる小学生と小さな子どもの間にも、自然に交流がおこっているという。

このように、「こどもひろば」が子育て支援のための特別な場ではなく、(特に子どもたちにとって)ちょっと立ち寄れる日常的な場になっていることが窺える。加えて、このことが、若い世代に対し、まちなかに来るきっかけと商店街に親しみを持つ機会を提供していると言える。

「こどもひろば」に来る子どもたちや大人は、商店街での買い物ついでに立ち寄るというよりは、そこに来ること自体が目的であるという。中川さんの話によると、一度来たことがある子どもは必ずまた来たくなるようである。それはなぜか。「こどもひろば」で過ごすことが楽しいことももちろんある。同時に、「かんかこかん」まで商店街の中を歩いてくるその道中もまた、子どもたちにとって楽しみなのである。郊外に住んでいる子どもにとっては、店が並んでいる様子は普段あまり目にすることがないものである。だからこそ、子どもたちは商店街を歩くこと自体におもしろさを感じるようである。また、「こどもひろば」を利用する母親たちも「商店街は意外に楽しかったわね」「街を歩くことの良さを初めてわかったわ」「高山の街をこんなにゆっくりと歩いたことはなかった」と話しているそうである。

このように、気軽に集え、大人も子ども互いに語り合える場である「こどもひろば」は、商店街と縁のなかった若い世代もまちなかに引き寄せられるきっかけになっている。「かんかこかん」は、子どもやその保護者が集える場(居場所)を商店街の中につくり、そのことでまちに行き交う人々を増やしていくことにつなげているのである。

(2) つなぐ - 思いをつなぎ、地域に(市民)活動を広げる -

「かんかこかん」の子ども・子育てに関わる活動の2つめは、子ども・子育てに関心を持つ人たちをつなぐことである。「かんかこかん」のまちづくりでは、個人の悩みや課題を他者と共有し、その軽減に向けた「こうしたい」「こうあってほしい」といったそれぞれの思いを実現

していくことが大切にされている。そのための方策として、そうしたことに関心のある人同士をつなげ、互いに支え合えるような関係づくりが行われている。子ども・子育てに関心を持つ人たちをつなぐことも、その意図を持っている。

では、それを体現している活動はどのようなものか。そのひとつは「あったかいこころの居場所づくりをすすめる人たちのつながる集い」というフォーラムの開催(2006年3月)であり、そのフォーラムをきっかけに発足した「こころんネット1・2の3」という子育てサークルや市民活動団体のネットワーク組織(2006年5月発足)である。

「かんかこかん」は、2005年に行われた10市町村の合併を受け、旧高山市だけではなく9つの旧町村にも、地域の拠点となるような居場所をつくることをまちづくりの課題として捉え、それに取り組み始めた。ここでの「かんかこかん」の役割は何か。「かんかこかん」自体が他地域にも「こどもひろば」のような「あったかいこころの居場所」をつくっていくことではない。各地域の人たちが主体となり、その人たちや地域の特徴に応じて居場所づくりに取り組んでいくことをサポートすることである。そのために、それぞれの地域で「あったかいこころの居場所」づくりに取り組みたいと考えている人々をつなぎ、お互いに協力し合いながらつくっていけるような仕組みをつくることでもある。それが前述のフォーラムの開催のねらいであった。フォーラムの開催にあたって、各地区で子育てサークル活動をしている人、行政職員、子育て中の人などに声をかけている。フォーラムには29人が集まり、日頃抱えている課題や思いを出し合い、「かんかこかん(こどもひろば)」みたいな場が各地域にあると良い、という共通の思いが出されたそうである。そこで、各地域で「あったかいこころの居場所」づくりに取り組む人たちが継続的に集い、課題を解決するための手がかりを互いに得ていけるように、「こころんネット1・2の3」が立ち上げられたのである。

この他に、「冬のあったか縁日」というイベントの開催があげられる。イベントでは、そこに参加する子どもや保護者が楽しむことに加え、イベントの準備作業や当日の団体活動の発表を通じて、子ども・子育てに関わる機関・団体同士が互い知り合うきっかけになることも意図している。ちなみに、このイベントはこれまでに2回実施されているようで、2006年12月の実施では、30団体を越える子育てを応援する市民活動団体、子ども未来財団、高山市などによる協働実施であったという。

このように、「かんかこかん」は、互いに支え合いながら、それぞれの地域で子育てしやすい場づくりをしていけるよう、支援活動に関わる人々をつなげる仕掛けを行っているのである。



子育て情報の掲示板

(3) 育む - 街と人の関係を育む -

「かんかこかん」における子ども・子育てに関わる活動の3つ目は、子どもと地域との関係を育む活動である。例えば、「こども忍者まち探検」が該当する。これは、子どもたちが忍者の格好をし、「屋台ぐら・秋葉さまさがし」や「お店のたからものをききだしてくる」といった忍者のお頭から受け取った指令にしたがって、商店街の中を探索するというものである。子どもたちは、商店街の店を訪ね、店主と話をしながら、あちこちと街中を調べ歩くことになる。子どもたちに商店街を歩く楽しさを知ってもらおうことをねらいとしているようである。というのも、この企画に参加する子どもの多くが郊外に住んでおり、普段の生活では商店街にあまりなじみがないためである。だからこそ、商店街の店主との交わる機会をつくり、子どもたちが様々

な仕事に触れるきっかけや街自体に興味・関心を持つきっかけを提供していると言える。

こうした活動は、子どもが地域の大人と関わり、まちの文化や歴史を学ぶという点で、子どもの育ちを促していると言えよう。同時に、高山市の中心市街地の課題である、まちなかの活性化を促す取り組みでもある。子どもたちが商店街に親しみを持つことにより、まちなかの現状に関心を向けることにつながる可能性がある。そして、自らが暮らす地域の課題に取り組む人を育てるという点で、まちづくりである。つまり、「かんかこかん」は子育て支援とまちづくりという2つのねらいを併せ持ち、子どもと商店街（そこに住む人々）とをつなぎ、子どもが楽しみながら地域に関心を持つような仕掛けづくりをしているのである。

3. 「かんかこかん」の運営・活動を支える協働

上述のような特徴を持つ活動は、多種多様な職業、立場の人が「かんかこかん」に関わっているからこそ成り立っていると考えられる。先にも述べたように、「かんかこかん」の運営は、市民活動をしている人たちの他に、行政職員、商店街なども関わっている。こうした協働の仕組みがつくられた背景には2つのことがあげられる。ひとつは、「高山市まちづくり・住まいづくり研究会」の活動経験であり、もうひとつは、商店街の人々の活動への巻き込みである。

(1) 「高山市まちづくり・住まいづくり研究会」の経験

「かんかこかん」の運営・活動のスタイルは、「高山市まちづくり・住まいづくり研究会」の経験をもとにしている。「高山市まちづくり・住まいづくり研究会」(以下、研究会と略す)は、1997年に高山市が住宅マスタープランの策定にあたり、市が市民に呼びかけ発足したものである(2002年に研究会の活動は終了)。この研究会に参加していた人々は、建築家、看護職、主婦、福祉関係者などの様々な職種の人であった。また、伊藤さんによれば、行政職員もまた一市民の立場から発言をしていたそうである。

この研究会から「かんかこかん」の活動・運営に引き継がれたもののひとつは、生活の中からもまちづくりを考えていくという視点である。研究会で設定された部会は、「まちなか」「みち」「こども」「ふれあい」「住まいづくり」の5つであった。設定されたテーマは「建築」「行政」「教育」「福祉」「医療」というような職種や行政の縦割りの枠組みを超えたものであり、生活者の立場で暮らしを考えた際に課題となる事柄になっていると言えよう。例えば「こども」の部会であれば、福祉の観点、教育の観点、建築の観点、消費の観点などから、子どもの生活に関わることを多面的に捉えていくことができる。また、こうした部会設定を行うことにより、同じテーマに関心を持つ異分野の人々が同じ話し合いの場につくることができたのである。このように、研究会ではこの生活者の立場からまちづくりを考えるという方針がとられていたのである。そして、それが「かんかこかん」の活動・運営方針の基になっているように思われる。

研究会から引き継がれたことのもうひとつは、各種の市民活動団体や商店街、行政職員とのつながりである。現在、「かんかこかん」の事業・活動では、「かんかこかん」が単独で行うよりも、複数の市民活動団体や商店街、行政などと一緒を実施しているものの方が多い。そうした協働を可能にしているのは、研究会の活動当時に培われたつながりである。研究会の学習会やフォーラム、イベントの開催の際には、多様な分野の人々、活動団体が参画し、その運営に取り組んでいた。例えば、計31回開催された「まちづくりカレッジ」では、その企画運営に関わった団体・組織は21団体であり、のべ1,361名(1回平均44名)の参加があったという⁸⁾。こうした取り組みを積み重ねることにより、行政や各種市民活動団体との間に信頼関係が築かれていったそうである。そして、その関係が、今や「かんかこかん」の活動・運営上の重

要な資源となっている。「かんかこかん」と常につながっている市民活動団体は 50~60 あり、何かあったときに、「かんかこかん」が声をかければ、これら多くの機関・団体等が協力してくれる、と伊藤さんは話す。

「子どもまち探検」や「冬のあったか縁日」といった「かんかこかん」の活動の企画運営では、実行委員会形式で行われることが多いが、この実行委員会形式も研究会の活動の中で培われてきた方式である。実行委員会は企画ごとに、先にみたようなつながりを活用して市民活動団体や行政、商店街、個人などに声をかけ、その都度立ち上げられる。このような実行委員会形式をとることで、運営が大変になることもあるという。にもかかわらず、「かんかこかん」が単独で企画運営することが少ない。それはなぜか。その理由として、次のことが考えられる。異分野の人々が企画から携わることで、他分野の活動を互いに理解し合う機会をつくるためと思われる。それにより、様々な人々が市民であるのか、商店街の人であるのか、行政の人であるのかといった立場を越えて、まちづくりの活動にかかわる力をつけるためではないだろうか。「かんかこかん」では、実行委員会に携わることを通じて培った経験やつながりを、それぞれがそれぞれの活動に活かし、活動の幅を広げていくことを大切にしていると思われる。

以上のように、今の「かんかこかん」の姿があるのは、5年におよぶ研究会の活動蓄積があったからであろう。そして、「かんかこかん」の開設後も、それを基に活動を展開してきたことが市民、行政、商店街などとの協働スタイルを確立させたと言えよう。

(2) 商店街の人々を巻き込む

「かんかこかん」の開設及びそこでの活動は、商店街との協力を抜きには語れない。そもそも「かんかこかん」の開設自体が、2000年度に始めた高山市商店街振興組合連合会（以下、市商連と記す）による「Dreamin 事業」（起業家支援などを目的とした空き店舗活用事業）を利用したものである⁹⁾。また、「かんかこかん」の施設運営に関わる維持費や光熱費（家賃や人件費は除く）は商店街が持っている。さらに、「子どもまち探検」のように「かんかこかん」の数々の活動は、商店街の協力を得ながら実施されている。

とはいえ、最初から「かんかこかん」の活動に対して、商店街から理解を得られたというわけではないようである。伊藤さんは、市商連の幹部以外では、活動への理解を得ることに時間がかかったと話している。

なぜ商店街と「かんかこかん」の活動をつなげることが大切なのか。「かんかこかん」の運営委員長であり、商店街の人間でもある伊藤さんは次のように語っていた。「車社会の中で、商店街が衰退していくのは無理ないところもあるじゃないですか。この先もある程度衰退していきだろ。・・・商店街が衰退していくことにより、商店街が儲けるとか儲けないとかじゃなくて、市民のコミュニティが壊れていくことにつながるだろう。だからこそ、まちなかの再生のために、商店街の活性化という枠を越えて、「まちに来る人を増やし、まちに住む人を増やす努力」（伊藤 2005、119 頁）をする必要がある。伊藤さんは、16、7 年前に初めて商店街活動に関わっていくなかでこのような課題を強く感じたと話す。市民の知恵を借りてつくられた「かんかこかん」とそこでの活動は、まさしくまちに来る人を増やし、商店街のなかを様々な人たちが行き交うように促すものである。

こうした伊藤さんの考えに対して、市商連の幹部の人々は早い段階から賛同し、まちなかの再生に取り組んできた。先の「Dreamin 事業」もそのひとつである。しかし、商店街の一般店主にとっては、商店街の活性化に直接的につながらないまちなかの再生に対し、なかなか関心を向けられなかった。そのため、商店街のなかにコミュニティ施設である「かんかこかん」を

つくることやそこでの様々な活動の意義について理解されにくかったという。伊藤さんはこの点を振り返って、「ずっとそれとの戦いだった」と比喻していた。そこで、商店街の人々に理解してもらうために、「軋轢をうまないで」すり抜けるための工夫をしたという。それが、「かんかかん」の活動に巻き込んでいくことであった。

例えば「子どもまち探検」の活動では、忍者のまち探検をやる際に、商店街の理事会で、各町内1、2人ずつ出してもらい、交通事故となどの事故が起こらないよう、子どもたちを見ていてくださいとお願いをする。自発的には人を出してもらえないため、役員などに強制的にでもらうようにしたという。来てもらった店主たちは、最初はあまり気乗りしない様子であっても、最後には真剣になり、一生懸命に子どもたちに関わるようになっていたそうである。このようなことの積み重ねにより、徐々に「かんかかかんの活動は良いことをやっているな」という理解につながっていったのである。

おわりに

「かんかかん」は高山市で10年近く市民と行政、商店街と模索しながら、協働で活動してきた結果として生まれてきたものと言えよう。そして、今、「かんかかん」は高山市のまちづくり活動の要となりつつある。「かんかかん」での子育て支援は、まちづくりを展開していく上での重要な働きとなっている。その活動は、子育て当事者にとって望まれる支援であるだけでなく、まちなかの再生にもつながる動きになっている。商店街の空き店舗を活用した子育て支援活動は、それまで商店街になじみのなかった子育て中の親とその子をまちなかに来る機会を与えることになる。そして、親子が商店街のおもしろさを知ること、まちを行き交う人を増やすことにつながっている。まちづくりからみれば、子育て支援活動はまちなかを再生するための大きな仕掛けであると言えよう。

では、子育て支援にまちづくりの要素を取り入れていくのはどのようなことか。この点を最後にまとめておきたい。第一に、地域の人々や異分野で活動している人々ともつながることを配慮することである。まちづくりという視点を取り入れることで、教育や福祉といった子育て支援に限定されず、建築、道路、地域の人とふれあい、お店などの視点から、子育ての環境や子どもの生活を多面的に捉えていくことができる。そのためには、異分野で活動している人々や地域の人々と話し合ったり、活動を一緒に企画運営したりすることが大切になるであろう。

第二に、子育てにやさしいまちづくりを担う仲間を増やすことである。自分たちの団体が活動している場のみで子育て支援を完結していくのではなく、また、自分たちの団体がすべてを網羅するのではなく、それぞれの地域で活動していく人とつながり、互いの力を引き出し合っていくことである。例えば、A団体に「こどもひろば」のような場所を他の地域にもつくってほしいという要望が出てきたとき、どのように対応するのか。A団体がそれに応え、自らがその地域につくる。あるいは、A団体がその要望に直接応えず、その地域で同じような場をつくることに関心のある人々に声をかけ、その人たちに任せ、そのためのサポートを行うことに徹する。どちらも、ひとつの子育て支援の場ができたことには代わりがない。しかし、ここには大きな違いがある。A団体が自ら新しい場をつくることは、A団体の活動の力や実績を伸ばすことになる。反対に、A団体がその地域の人にその場をつくることを促せば、それは、その地域の人たちが自らの力でその地域をより生活しやすい環境に変えていくための力を伸ばすことになる。それにより、A団体はその人たちとのつながりを築くことができる。加えて、A団体の活動に今後協力してもらおうことができるようになるかもしれない。この後者がまちづくりの

視点を取り入れた子育て支援活動の展開である。

第三に、子育て中の親もまちづくりの担い手であることを留意することである。子育て支援活動では、個々の子育て中の親子のニーズを満たすことに力が注がれる。そのため、活動を通じて、互いに支援する者とされる者という感覚に陥りやすく、子育て中の親はサービスを消費していく感覚を強めていくことになるであろう。しかし、子育て中の親も自らの子育てをしている環境を変えていくことができる担い手であり、活動を通じて、その力をつけることもできる。ここで、まちづくりの視点を取り入れていくことは、支援する者とされる者という枠を越えて、子育てをしやすいまちをつくるために努力する者同士であるという感覚を築いていくことになる。

以上のように、「かんかこかん」の活動から、まちづくりを取り入れて子育て支援を展開していくことの持つ意味をまとめてみたが、「子育て支援」は「まちづくり」であり、「人づくり」であることを改めて強く感じる。

(渡辺 恵)

<注>

- 1) 「かんかこかん」とは、飛騨のお祭りで使用されている鬮鶏楽の鉦(かね)の音色をあらわしたものである。この名称は、音の響きがよいことや高山の人々にとっては親しみの深いものであるということから採用されたそうである。
- 2) このような空き店舗活用の取り組みは、2004年4月に出された「商店街空き店舗を活用した保育サービス等提供施設の設置促進に関する指針」(厚生労働省雇用均等・児童課程局及び中小企業庁商業課)を契機にしている。この指針は、商店街のにぎわいの創出・活性化を図ることを目的にした空き店舗のコミュニティ施設活用事業と連携して、空き店舗での子育て支援事業を図ろうというものである。(厚生労働省「商店街の空き店舗を活用した保育サービス等提供施設の設置促進に関する指針について」 厚生労働省ホームページ：アクセス日 2007年4月3日 <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/04/h0408-2.html>)
- 3) 出生数は、年々減少しているが、2003年における旧高山市の合計特殊出生率は1.66と全国数値(1.29)を上回る高い数値である。高山市行政情報(人口動態): アクセス日 2007年3月19日 http://www.city.takayama.lg.jp/kikaku/aramashi/untitled_001.html
- 4) この点に関しては、『高山市子どもに優しいまちづくり計画』(2005)及び伊藤さんと中川さんからの話による。
- 5) 伊藤さんや中川さんの話では、3歳から保育園・幼稚園に就園する傾向にあるという。
- 6) 旧高山市の観光客数は、平成16年度では年間約280万人である。なお、観光客は年々減少してきている。高山市行政情報(観光の状況): アクセス日 2007年3月19日 <http://www.city.takayama.lg.jp/kikaku/aramashi/kankou.htm>
- 7) ベビーカー、車椅子、電動スクーターのレンタルがあり、観光客や買い物客に利用されている。加えて、「こどもひろば」では、一時保育(1時間千円)も行われている。この一時保育の特徴は、乳幼児から小学生までが保育の対象となっていることである。小学生の預かりは長期休暇や休日のときに主に利用されている。また、「こどもひろば」に遊びに来ている親子が一時保育を利用することが多いのも「かんかこかん」の特徴である。この点は、一時保育の際に、子どもが遊び慣れた環境のなかで安心して過ごすことができるという利点もあるようである。

- 8) 伊藤早苗「子育て支援を含めた市民の交流の場を商店街の空き店舗に実現」中小商工業研究所『中小商工業研究』第85号 2005 119頁。
- 9)「Dreamin 事業」は、起業家支援とまちなかのにぎわいの創出を目的として、2000年度より始められたものであるこの事業は市商連が事業主体となり、商店街の空き店舗を利用して、起業家に低料金で店舗スペースを提供すると同時に、高山市も改修費や賃貸料などを支援するものである。この事業の企画は、先の研究会活動によって築かれたつながりからつくられたものであり、運営は商店街の人々に加え、市民、商工会議所、行政が参加した空き店舗活用企画「ドリーミン」実行委員会によって行われている（「Dreamin 事業（高山市空き店舗活用事業）」<http://www.takayamashishouren.net/d2/index.html>）。

< 参考資料 >

- ・「まちひとぶら座 かんかこかん」ホームページ：2007年3月19日
<http://www.takayamashishouren.net/kankakokan/index.shtml>
- ・「かんかこかん News」(Welcome to Dreamin official site 内): 2007年3月20日
<http://www.takayamashishouren.net/d/>
- ・「Dreamin 事業（高山市空き店舗活用事業）」：2007年3月22日
<http://www.takayamashishouren.net/d2/index.html>
- ・『飛騨高山まちづくり本舗』 2004
- ・伊藤早苗「子育て支援を含めた市民の交流の場を商店街の空き店舗に実現」中小商工業研究所『中小商工業研究』第85号 2005 119頁。